阿 波 の ま ち な み 研 究 会 報

2022 年 7 月号

vol.338

■第 45 回太鼓楼見聞録　・・・・・・・・・・・・・・・・2～4

■東祖谷　釣井薬師堂　調査報告　・・・・・・・・・・5～7

■事務局通信　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

阿　波　の　ま　ち　な　み　研　究　会

〒770-0931　徳島市富田浜 2-10　(公社)徳島県建築士会

phone：088-653-7570　　fax：088-624-1710

太鼓楼見聞録（45）

鈴鹿市旧神戸城太鼓櫓（現蓮花寺鐘楼）

谷中　俊裕（阿南高専）

１．はじめに

これまでの連載では、旧近世城郭の太鼓櫓で寺社に移築現存しているものを 2 件紹介した。丹波市の柏原陣屋（37 回）と西条市の小松陣屋（39 回）のものである。今回は伊勢国の神戸（かんべ）城の太鼓櫓を紹介したい。この太鼓櫓は近隣の蓮花寺に現存する。また、城郭ファンの期待にも応えるため、神戸城そのものにも併せてやや詳しく触れたい。

２. 鈴鹿市と神戸の地理と歴史

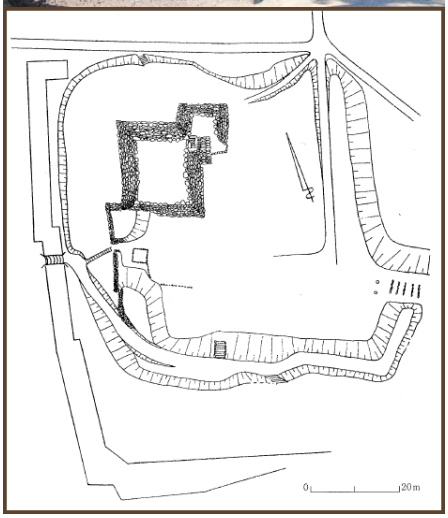
鈴鹿市は、元の鈴鹿郡だけでなく、河曲（かわわ）郡と奄芸（あんき）郡域をも含む多数の町村を吸収しながら成立した。しかし、結果的には、現在の市域は、西方の鈴鹿山脈に源を発する鈴鹿川とその支流の流域とまとめることができる。鈴鹿川水系の中下流域には、低い河岸段丘や谷底平野を含む沖積平野が広がり、古代より豊かな農耕地帯であった。おそらくこのことと、東国への睨みを効かせつつ南の神宮とも連携できる要地でもあることから、伊勢国の国府と国分寺も鈴鹿市域に置かれている。神戸の地名の由来は、国造級の豪族が神田とともに神宮に奉献した封戸（ふこ、給付された者が、税相当分を収入として徴収できる戸）と推定される。（文献① 287）

中世において鈴鹿川流域で最も勢力を誇ったのは、伊勢平氏の流れとされる関一族であった。清盛の玄孫とされる実忠が御家人として鈴鹿郡関谷二十四郷の地頭に任じられ関姓を名乗る。その五代の孫盛政は、正平 22 年（1367）に領内を 5 人の男子（関五家）に分割した。（文献① 481-5）そのうち特に華々しい活躍をしたのが神戸家である。初代盛澄は、同年神戸の南西の平地に沢城を築き拠点とした。（① 562）　4 代具盛（とももり）は、天文年中（1550 前後）に低い平山城である神戸城に居を移した。（① 564）5 代友盛の代、永禄 10 年（1567）織田信長が北勢への侵入を開始する。信長は、三男織田三七郎信孝を神戸家の養子とすることで神戸家を含む関一族を配下に入れる。（① 572-4）天正 10 年（1582）本能寺の変で父信長と兄信忠が没すると、信孝は信忠の所領美濃を受け継ぎ、岐阜城に移る。しかし、信長の後継者争いで劣勢になり、翌年賤ケ岳の戦に呼応した際、岐阜城を明け渡し自刃した。（文献② 10-24）

神戸城の主は、神戸/織田信孝の後、目まぐるしく変わり、江戸期に最終的に落ち着いたのは、近江膳所（ぜぜ）藩本多家の分家本多忠統（ただむね）が享保 17 年（1732）に入封してからである。（実際に知行地の神戸に赴いたのは 2 代忠永から。）以後 7 代忠貫（ただつら）で明治を迎える。（② 157-92）

近世を通して、神戸の地は、城下町・陣屋町として、また伊勢街道の宿場町としても栄え、近代においてもこの地に鈴鹿市役所が置かれているのは当然の流れであろう。

３．神戸城の歴史と遺構



上 写真 1：神戸城天守台南東面

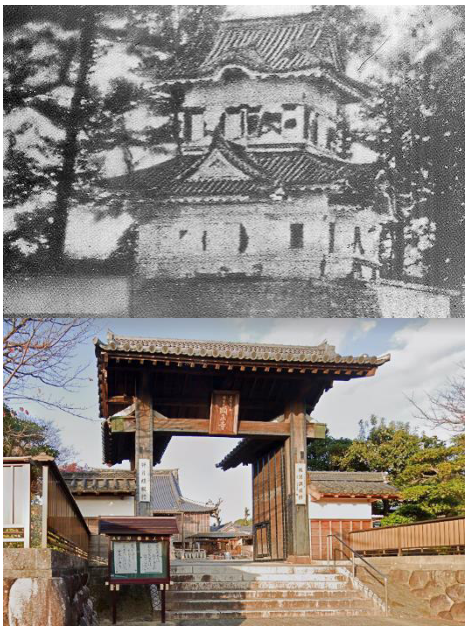
下 図 1：神戸城本丸の現状図 （文献② 6）

戦国末に神戸具盛が築城した神戸城は、天正 8 年（1580）以降、神戸/織田信孝により大幅な拡張を受ける。このときの建造と推定される天守は、文化 14 年（1817）細田九右衛門による（伝承の）記録『諸用雑記』に、六重天守の詳細な寸法が伝わる。初重と二重、三重と四重が同寸で、五重より六重が張り出しており、*二重の大入母屋を二組重ねた上に、岩国城天守のような上から二層目がくびれた「南蛮造」の上層を重ねた姿が目に浮かぶ。*しかし、記された平面の寸法は、現在残る天守台に一致しない。現存の天守台（写真 1、図 1）は、東西 11.3m×南北 14.5m で、*六重天守用としては小さ過ぎるように見える。*石垣は野面積で、側面の中央が窪んでおり、平面図でも糸巻状に痩せている。*これは、初期の石垣天守台の特徴であろう。*北西隅と南西隅には 6m 四方の小天守台（1 つは付櫓台か）と思しき張り出し部分の石垣が付属する。*小天守が直結しているので「複合型天守」と呼べるが、対角線方向に一対の小天守が直結したのなら非常に珍しい意匠である。*織田信孝による天守は、わずか 15 年にして

解体され、桑名城天守として移された。後に桑名城天守が新築された後も「神戸櫓」として存続した。*寛文年間（1661～73）の古絵図（文献③）での桑名城神戸櫓は三重なので、材を転用しただけかもしれない。*（この段文献② 5-9 参照、*斜体部*は筆者の私見）

江戸期を通して存在した神戸城の郭配置は、神戸信孝の代のものと推定される。*その後に入封した城主の石高が少ない（最大でも一柳氏の 5 万石、他は 1～1.5 万石程度）ため、城域が拡大されることもなかったと思われるからである。*この郭配置の案内図が城跡に立つ。（図 2）現在、現地に残るのは、天守台と堀の一部を含む本丸付近の地形のみである。

図 2：神戸城郭図（文献④）太鼓櫓の旧位置は二ノ丸南東隅



上 写真 2：二重櫓古写真（文献②口絵）
下 写真 3：移築大手門（四日市市顕正寺）
Google Street View

最後に入封した本多氏が、神戸信孝以降で最も腰を据え、寛延元年（1748）まで 3 年をかけて、建造物を整備した。二重と一重の隅櫓、高麗門形式の大手門、太鼓櫓などである。（文献② 220-6）明治 8 年（1875）ごろ、二重櫓のベストアングルの写真 1 枚（写真 2）と二重櫓と一重櫓の写実的な絵馬を残して、両櫓は解体された。*二重櫓は、上層入母屋、初層に千鳥破風と大唐破風、上層にも軒唐破風を配し、壁面は上下層とも白亜の総塗籠で、横向きに二筋の長押形が走り、初層の中央には張り出しがあり、軒裏は上下層とも垂木を波形に塗籠めていたことが分かる。*大手門は、いかにも城門らしい建ちの高い高麗門で、四日市市の顕正寺（西日野町 2970、真宗高田派）の山門として移築されている。（写真 3）太鼓櫓については次節で詳述する。

４. 蓮花寺鐘楼（旧神戸城太鼓櫓、鈴鹿市指定文化財、鈴鹿市東玉垣町 994、真宗高田派）—内外とも単層の入母屋鐘楼、建ちが高く、軒裏の長押形・波形漆喰塗籠と壁面の黒下見板張の対照が美しい

津市一身田の真宗高田派本山専修寺の影響で、鈴鹿市を含む近隣にも高田派寺院が多い。神戸城南東 2km の地に伽藍を構える蓮花寺もその中の主要寺院の一つである。創建についての詳しい経緯は伝わらないが、*初代住職の安立上人の入寂年が貞享 3 年（1686）、前の大戦中に供出した旧梵鐘の銘に元禄 4 年（1691）とあった（文献⑤）と伝わるので、少なくとも江戸初期の中興は確実であろう。*現ご住職の談では、ごく最近、終戦直後焼失した本堂の再建に際して、中世に遡る寺史を示す資料が発見されたそうだ。

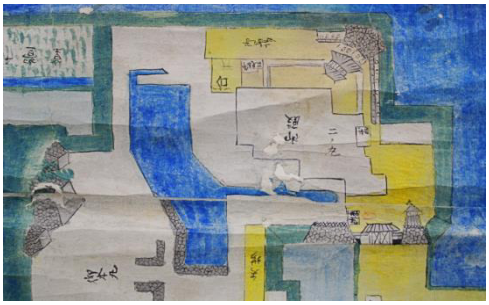


図 3：幕末の神戸城図拡大(右下門右に太鼓櫓)

蓮花寺の鐘楼は、明治 8 年（1875）に神戸城の太鼓櫓を移築したものである。（文献⑤）太鼓櫓の創建は厳密には不明であるが、延享 5 年・寛延元年（1748）葉屋又兵衛なる者が太鼓を寄進し、城内で初めて太鼓が打たれたと記録があるので、この頃の創建とみて問題なさそうである。（文献② 226）本多氏の家紋の立葵の瓦が多く用いられていたことも、最後の城主家本多氏時代の建造であることを物語る。（文献⑥）また、昭和 61 年竣工の大修理が施されている。（文献⑤）

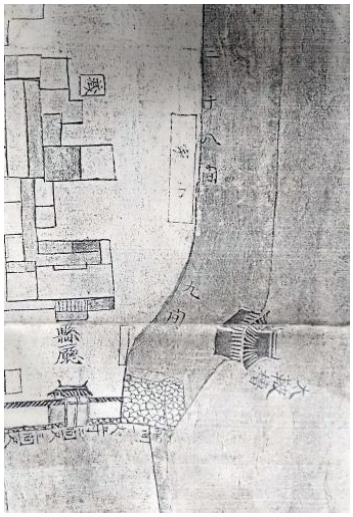


写真 4：「旧神戸藩城池(地?)之図」拡大 右に太鼓櫓（文献⑥）

元の城内での位置は、幕末の絵図では、三之丸から二ノ丸に入る虎口右手の石垣の上に描かれている。(図 3) しかし、明治 4～5 年の絵図では、少しずれた土塁上に建っている。(図 4) (図 3、4 とも図 2 の方向に合わせている。) これは、単にどちらかが正確さを欠くからか、維新直前に太鼓櫓が移築されたからということになる。*明治直前に城中で移築したというのは蓋然性に欠ける一方、維新後の図の太鼓櫓は、現状の鐘楼の特徴がよく描けているので内容的にもより信頼性がある。筆者は、門の外側正面から見ると、土塁上の太鼓櫓が土塁を固める石垣上に建つように見えたのだろうと解釈したい。*

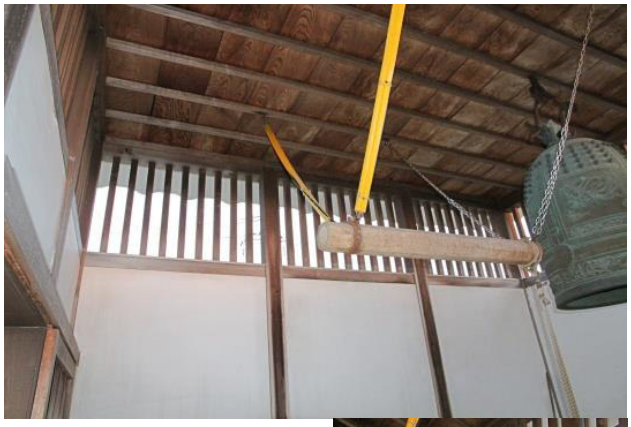
写真 5：蓮花寺鐘楼北東面

写真 6：同南西面

現状詳細は、以下の通りである。桁行三間 (実寸 2.5 間)、梁間三間 (実寸 2.0 間)。入母屋妻入桟瓦葺。軒裏は、丸桁と隅木は白漆喰長押型、二重櫓同様垂木は波形に白漆喰で塗籠める。壁面はささら子下見板張大壁、上部は全面連子窓。丸石石垣上に花崗岩の基壇。外観、内部とも上下層の区分はなく、二階床の痕跡もない。竿縁天井から昭和 32 年の銘の二代目梵鐘が吊られる。現在では、鐘は除夜の鐘としてしか叩かれないそうだ。

かつての太鼓も、上部の連子窓から音が抜けやすいように、高い太鼓台に乗せられるか、天井から吊られていて、打ち手も叩き台に乗っていたと推定される。

写真 7：同軒裏見上げ



上 写真 8：鐘楼内部平側

下 写真 9：同入口付近

5．おわりに

旧神戸城太鼓櫓の建ちの高い単層の外観は、連載 41 回の豊田市の守綱寺の太鼓楼との類似性が気になる。これまで、城郭ファンとしては、近世城郭の二重櫓を髣髴する太鼓楼を紹介したい衝動に駆られてきた。しかし、太鼓楼は本来二重櫓である必然性も、逓減がある必然性もなく、むしろ、そうでないものが太鼓楼の原型かもしれない。これからも、典型的な城郭風二重櫓でない太鼓楼も紹介していきたい。

参考文献

①鈴鹿市教育委員会編（1980）*『鈴鹿市史 第一巻』*，鈴鹿市役所.

②鈴鹿市教育委員会編（1983）*『鈴鹿市史 第二巻』*，鈴鹿市役所.

③作者不明（寛文年間 1661～73 か）*『寛文年間桑名郭内地図』*，桑名市鎮国守国神社蔵,

④鈴鹿市教育委員会編（1983）*『神戸城跡』*，現地の城跡解説板.

⑤和田佐喜男（蓮花寺世話人）、伊藤康生（先代ご住職）（1952～）*『蓮花寺畧縁起』*，未刊行物，蓮花寺蔵，頁付与なし.

⑥鈴鹿市教育委員会編（1982）「蓮花寺鐘楼（旧神戸城太鼓櫓）」*『文化財調書』*，未刊行物，文化財指定時の調査結果，頁付与なし.

⑦作者不詳（1863）*『勢州河曲郡神戸之城図文久四年写』*，鈴鹿市蔵.

東祖谷　釣井（つるい）薬師堂

調査報告

代表幹事　坂口敏司

徳島県三好市東祖谷山の重要文化財木村家住宅のある釣井集落に建つ薬師堂が平成31年3月18日開催の文化審議会で登録有形文化財に答申されました。その調査を行い、所見作成をしたので報告します。

建物概要

（1）所在地　：三好市東祖谷釣井
（2）構造規模：木造平屋建宝形造銅板葺
（3）床面積　：18.87m2
（4）建築年代：文久2年（1862）（棟札による）
　　昭和 33 年　茅葺屋根から小屋下げ

この堂は、東祖谷釣井にあり、重要文化財木村家住宅背面の斜面を登った平坦な敷地に建ち、隣接して五社神社がある。創建は不明であるが、延享4年(1747)の棟札を有している。

本尊は、薬師如来立像で中央に置き、両脇に毘沙門天、不動明王を祀る。両脇の仏壇の左側には日光月光尊と十二神将、右側に弘法大師坐像を祀る。

主屋は、正面三間、奥行三間に、奥のせがい造り出桁部分を仏壇として取り込み四間とする、縁は三方に切れ目縁を回す。正面と両側面一間は、開放され、雨戸を填める、両奥二間と仏壇廻りは壁で囲う。半解放型の三間堂である。

屋根は、宝形造り銅板葺きで、せがい造りとし軒を深く出す。柱は、自然石の上に角柱を建て、地貫、切目長押、内法長押を回し固める、切目長押と内法長押は雨戸の敷鴨居を兼ねる。柱頭部は、後補の外壁トタン張りで不明である。

内部は、正面を仏壇とし3等分し柱を建てる、それぞれに両開きの桟唐戸を吊り、長押より上部は彫刻された板欄間を填める。床は拭板張り、天井は竿縁天井とする。

建築年代は、棟札から文久 2 年(1862)の建立で、大工は「賀茂村藤原浦之助幸勝、大西村藤原辨太吉一」である。当初は、茅葺き屋根であったと推察され、大正 7 年の棟札には「家根屋半田　高岡利喜造、石内茂三良」とあり葺き替えが行われたと思われる、昭和 33 年の棟札では、「屋根師　田岡久義、大工匠　双郷正一」とある、この頃より民家では小屋下げし、茅葺からトタン葺に葺き替えが盛んになることから、大工の名前が見られるので小屋下げし現在の屋根形状に改修されたと考えられる。平成 11 年の棟札は、屋根葺替とあり、現在の銅板葺きとした時のものである。

この堂は、東祖谷では、数少ない江戸末期の貴重な堂宇で、重文木村家住宅とともに、この地域の歴史的景観に寄与している。

現況写真

正面

正面
雨戸を開放した状態

側面

内部正面
仏壇の扉を開いた状態

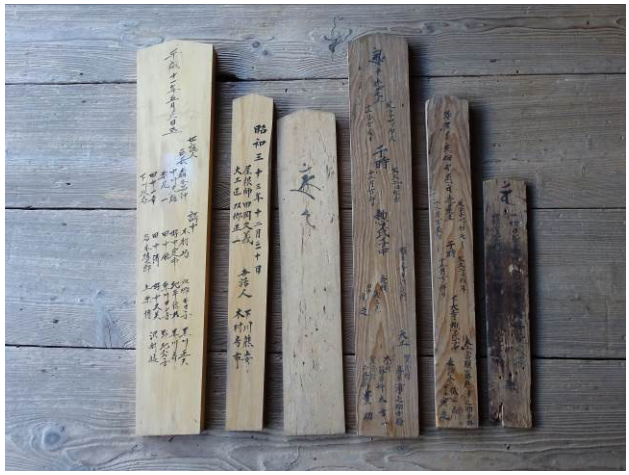
側面
雨戸を開放した状態

軒裏（セガイ造り）

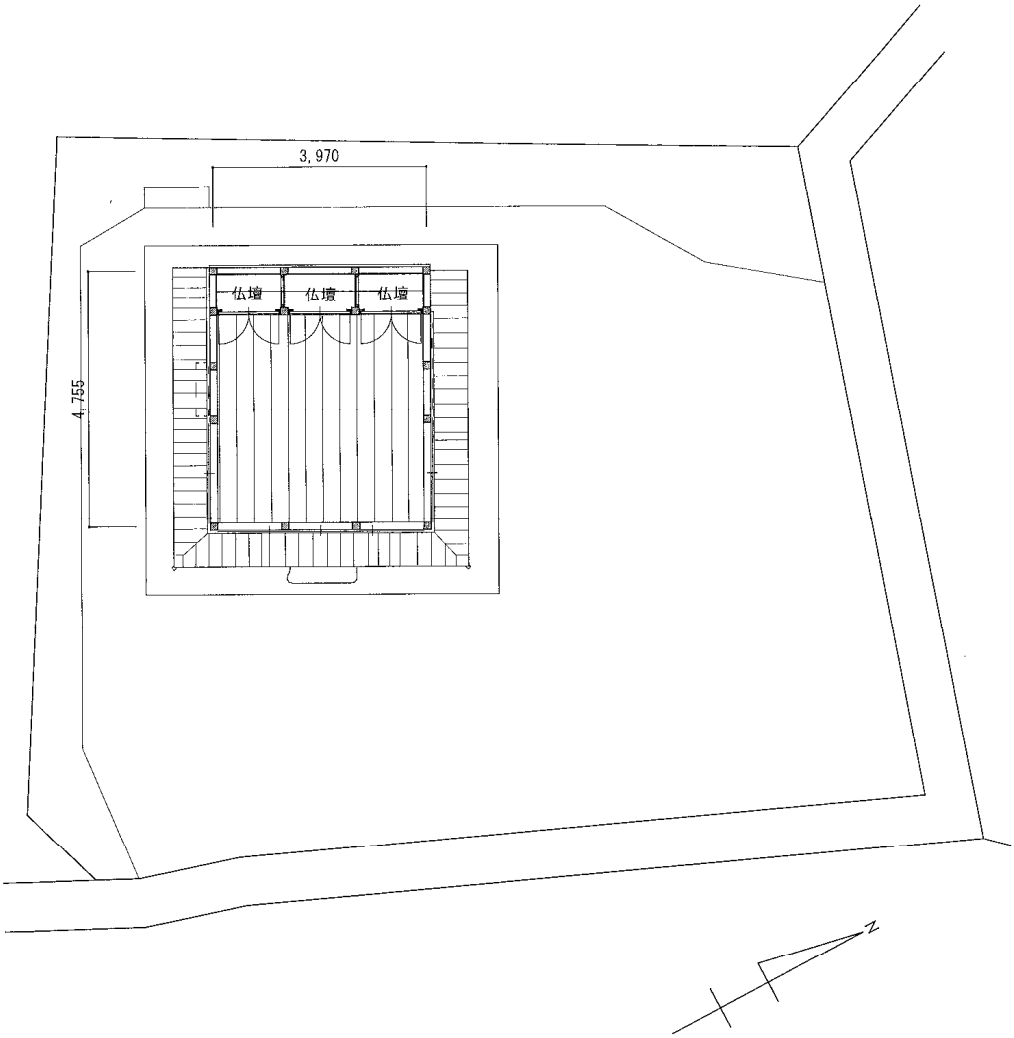
内部　正面
仏壇の扉を閉めた状態

欄間

棟札（表）



棟札（裏）



平面図

【事務局通信】

令和４年５月の例会の報告

◇令和4年月5月 20 日(金)18:00～建築士会会議室
まち研だより発送作業：坂口、林、松尾、丸山、島田

◇例会　令和4年5月 20 日(金)　19:00～21:00
参加者　：　坂口、谷中、林、松尾、丸山、島田

◇松尾さんから
1. 阿波学会総合学術調査小松島市の中間発表会の内容について(民家班)
2. 富山県の重要伝統的建造物群保存地区の紹介をしていただきました

令和４年６月例会の報告

◇令和４年６月 17 日(金) 19：00～　建築士会会議室
出席者：坂口、谷中、林、丸山

◇谷中さんに建築学会四国支所で発表された研究について、発表していただきました(日本語で)。

令和４年８月例会のお知らせ

◇令和４年８月 19 日(金)19：00～
建築士会会議室

◇まち研だより発送作業はありません。

編集部から

☆出羽島に開設された「建築士会まちづくりハウス」の運用が始まりました。建築士会 HP の会員専用ページに詳細が掲載されています。ご利用希望の方は、士会会員までお知らせください。

↑まちづくりハウスで都会の疲れを癒すＨ嬢？

☆ウィズコロナが定着しつつ、以前のような日常がようやく戻ってきたかな、と思った矢先新型コロナ感染症がまたまた不穏な状況になってきました。皆さま、ご自愛ください。

☆引き続き原稿を募集しています。送付は以下のアドレスまで
Mail to: m-style@mb.pikara.ne.jp

《まち研だより》2022 年７月号 VOL.338 号
発行日　令和４年７月 15 日(金)
発　行　阿波のまちなみ研究会
〒770-0931 徳島市富田浜２丁目 10
(公社)徳島県建築士会
TEL. 088-653-7570　FAX. 088-624-1710

代表者　坂口敏司(坂口建築設計室)
事務局　真鍋憲資(studioKEN)088-635-4272
studioken@mc.pikara.ne.jp
編集者　島田めぐみ(M-STYLE 設計室)
谷中俊裕(阿南工業高等専門学校)